

フランス革命初期のジャクリーと暴力

—バス-ノルマンディー、現オルヌ県の場合—

近 江 吉 明

はじめに

本稿はフランス革命初期に見られた、しばしばジャクリーとも表現されていた民衆蜂起の展開の中に確認される「下からの」暴力行使の実態やその特徴を捉えて、蜂起衆の行使した暴力の質を検討しようとするものである。分析対象となるのは、バス-ノルマンディーの現オルヌ県中・西部地域に発生した中小都市部や農村教区の「ジャクリー」の動きである⁽¹⁾。

このタイトルでの執筆にあたり押さえておかねばならない研究史の流れについては詳論を避け、諸業績を一括提示するにとどめる。しかし、とりわけ G=ルフェーヴルや A=アド等の仕事をベースに、また、本稿に直接係わる最近の成果として、ジャン-クロード=マルタン、ティモシ=タケットらの研究に依拠し、日本側のそれとしては、この時期の農民の動きの多様な側面に注目した遅塚忠躬や、民衆運動の自律性を捉えた柴田三千雄等の仕事に支えられていることは明らかにしておかねばならない⁽²⁾。

ところで、当地域のこの時期の民衆蜂起については G=ルフェーヴルの研究以来、常にマークされてきたところでもある。本稿も含め、筆者のここ10年ほどのこのテーマでの研究は、実証的なそれとしてルネ=ジュアンヌ⁽³⁾の仕事や、方法論の類似性という点でカリヌ=デュロン⁽⁴⁾の研究に多くを学んできている。分析視角としては、G=ルフェーヴルがいうところの「集合体から結集体へ」⁽⁵⁾「革命的集合心性の形成」の場面を蜂起展開の中に

求めるということをしてきている。

これまでの筆者の分析では、オルヌ県中・西部に確認された蜂起が1788年ころより顕在化し、1789年陳情書作成と代表者決定のための第一次選挙集会前後からは県中・東部で食糧蜂起が頻発し、全国三部会開催以降からバステューユ事件ころまでには県全域の中小都市の徴税事務所での反税蜂起へと拡大し、そして、7月22日からは県北西部の農村教区や中小都市で領主城館闘争が繰り上げられ、8月2日までにリレー方式のように県中・南部の各農村教区へと波及していったことが確認されている。⁽⁶⁾

本稿では、第一に、1789年7月までのそれらの全体的な発生状況を掌握し、第二に、7月22日以降のジャクリーの展開を、とりわけ県西部アンデーヌの森周辺の三つの農村教区に注目し、城館攻撃の際に行使された多様な暴力行使の現場を再現し、第三に、そこで確認できた暴力行使の類型的把握により、暴力行使の構造やそこに込められた蜂起衆の思いを浮き彫りにする。

使用される基本史料は、第一次選挙集会時にまとめられた「陳情書」⁽⁷⁾と蜂起終了後に蜂起関係者からの事情聴取によって作成された「警察調査」⁽⁸⁾であるが、各農村教区の経済状況やそこでの蜂起指導層の社会的位置を確認するために1790年の「物乞い（救貧）に関する委員会」のオルヌ県調査記録⁽⁹⁾と「タイユ課税台帳」⁽¹⁰⁾も利用することになる。

- (1) 近江吉明「バステューユ以前のジャクリー」(『専修人文論集』第70号, 2003年); 同「グランド-プール期のジャクリー-バス-ノルマンディー, オルヌ県の場合」(『専修人文論集』第77号, 2005年); 同「フランス革命期のジャクリー」(専修大学社会知性開発研究センター・歴史学センター年報『フランス革命と日本・アジアの近代化』第4号, 2007年); 同「アランソンにおける1789年の食糧蜂起」(『専修史学』第44号, 2008年); 同「民衆蜂起における蜂起指導層と蜂起衆-フランス革命初期のオルヌ県の場合」(『専修史学』第46号, 2009年)。

なお本稿は、2009年6月13-14日に専修大学生田校舎で開催された、日本西洋史学会第59回大会における小シンポジウム「フランス革命と暴力」で報告された原稿に加筆訂正したものである。

- (2) Georges Lefebvre, *La Grande peur de 1789, suivi de les foules révolutionnaires*, Paris, 1932, réed., 1988; George Rudé, *The Crowd in the French Revolution*, Oxford, 1959; Paul Bois, *Paysans de l'Ouest, des structures économiques et sociales aux options politiques depuis l'époque révolutionnaire dans la Sarthe*, Paris, 1960; Albert Soboul dir., *Contributions à l'histoire paysanne de la Révolution française*, Paris, 1977; Anatoli Ado, *Paysans en Révolution: terre, pouvoir et jacquerie 1789-1794*, Paris, 1996 (en russe 1987); Edward P. Thompson et als., *La Guerre du blé au XVIIIe siècle*, Paris, 1988; P.M. Jones, *The Peasantry in the French Revolution*, Cambridge, 1988; Jean-Claude Martin, << La Terre en Révolution >>, *Le Pays Bas-Normand*, n. 194-196, 1989; Timothy Tackett, << La Grande Peur et le complot aristocratique sous la Révolution française >>, *Annales Historiques de la Révolution française*, n. 335, 2004; 柴田三千雄「社会運動の『自律性』について—フランス革命期のパリ—」(『思想』第740号, 1986年); 同「フランス革命研究の新地平」(『思想』第789号, 1990年); 遅塚忠躬「ロベスピエールとドリヴィエ—フランス革命の世界史的位置—」, 東京大学出版会, 1986年; 同「フランス革命期の農民運動」(『思想』第789号, 1990年)。
- (3) René Jouanne, << La Réaction paysanne dans la généralité d'Alençon, juillet août 1789 >>, *Bul. du Comité de l'Orne*, 1937; id., << Les Emeutes paysannes au Pays Bas-Normand >>, *Le Pays Bas-Normand*, n. 105, 1957.
- (4) Karine Dulong, << Citadins et paysans en colère en 1789: Emeutes frumentaires et révoltes anti-seigneuriales dans la généralité d'Alençon >>, *Le Pays Bas-Normand*, n. 216, 1994.
- (5) G. Lefebvre, << La Foule, actes de la semaine internationale de synthèse >>, *A. H. R. F.*, n. 1, 1934.
- (6) 近江「グランド-ブール期のジャクリー」。
- (7) << Cahiers de doléances des paroisses >>, *Lignou*, Archives Départementales du Calvados, série 16B, 116; id., *La Coulouche*, A. D. C., série 16B, 66; id., *Couterne*, A. D. C., série 16B, 70.
- (8) << Procès-verbal, dressé par la maréchaussée >>, Arch. Dép. de l'Orne, série B et B Supplément 14.
- (9) << Instruction du Comité de Mendicité >>, A. D. O., série L. 1722.
- (10) << Tailles >>, A. D. O., C 1274.

1. 1789年8月までのオルヌ県全体状況と蜂起展開

オルヌ県は1790年に県としての現在のまとまりを持ったが、それまでは

複数のバイイ管区に属していた。①アランソン・バイイ管区（下級管区にアランソン、アルジャンタン、ドムフロン、エム、ヴェルヌイユ）と、②ペルシュ・バイイ管区（ベッレーム、モルターニュ）がオルヌ県域の大部分を占めていたが、その他は、③カーン・バイイ管区（ファレーズなど）、④エヴルー・バイイ管区（ブルトウイユなど）、など現在の隣接諸県に中心を持つバイイ管区に属していたので単純な括り方はできない。また、農業構造をみてもアルジャンタンとアランソンを結ぶ線の西側はボカージュ地帯で穀物生産性が低く、巨大森林のほか山間部・丘陵地帯が連なっている所で、酪農が重視され、冶金業や木工加工業などの農村工業が定着していた。それに比べ、東部地帯はそれよりは穀物生産も高く、酪農に依存する傾向はあるものの西部よりも農耕中心の地域だった。おのずと経済不況や気候変動にともなう不作の影響など、その表れ方に違いがあったことは言うまでもない。

それでも、オルヌ県としてのまとまりで、概ね次のような整理が可能のように思える。「年表」や「地図」資料などを見ながら概観しておくことにしよう。

（１）1789年前半期の動き

さっそく＜資料１＞の「年表」を見ると、1788年にアンデーヌの森周辺の農村教区で森林用益権に係わる動きが、４月にグロ・ドゥエなどの諸農村教区で、10月にラ・クーロンシュ付近の農村教区で見られる。これは、アンデーヌの森が1747年に王弟陛下であるレーヌ侯ルイ・フランソワ＝ダルグージュの所有する新王領地になって以来、ここにあった森林用益権がその他の共同体的諸慣行とともに禁止されたことと深く関係している。

しかし、今までのところ確認されている民衆蜂起の動きは1789年２月以降に集中している。これが1789年５月１日開催予定の全国三部会に向けて

<資料1> オルヌ県各地の民衆蜂起関連年表

(オルヌ県各地)	(フランス全体)
(1788年)	
4月24日 グロ-ドゥエなどの諸農村教 区で森林監察官らに対して蜂 起	6月7日 グルノーブルで「瓦の日」事 件 8月8日 国王, 1789年5月1日に全国 三部会を召集することを決定 9月25日 バリ高等法院, 全国三部会を 1614年方式で召集することを 要求
10月11日 ラ-クーロンシュなどの諸教 区で樵たちが中心となって蜂 起	12月27日 国王顧問会が第一, 二身分代 表の合計と第三身分代表とを 同数とすることを決定
(1789年)	1月24日 全国三部会選挙規定公表され る(選挙人は25歳以上, 課税 台帳登録者とされる)
2月9日 アランソンなど各地で全国三 部会召集状読み合わせ会が開 かれる	
同 レグルで食糧蜂起	
2月10日 アランソンの国王代理官, 3 月16日以降に3身分の全体集 会開催を決定する	
2月19日~4月18日 アルジャンタン, ベルネイ, エヴルー, ノジャ ン-ル-ロトルウ, ファレーズ, モルターニュ, ペツレーム, アランソン, セーなどの中小 都市部で食糧蜂起発生	

2月～3月 オルヌ県全域で、第三身分
の第一次選挙集会在開催され、
教区や業種毎に最初の陳情書
作成

3月23～25日 アランソン・バイイ管内
の第三身分の全体集会開催を
開催し、最終陳情書の作成と
代表者の決定

6月17日 バッレームで食糧蜂起

7月2日 アランソンで食糧蜂起

7月19～20日 アルジャンタン、レグル、
モントレー、ファレーズ、ド
ムフロン、カルージュで間接
税事務所や塩倉庫が攻撃され
る

7月22～23日 アランソンにプリガン
(盗賊団)襲来のニュース伝わ
る

7月22日～8月2日 オルヌ県北西部に
始まった領主城館攻撃(ジャ
クリー)が、県西・中部の中
小都市や農村教区に波及する

4月26～28日 レヴェイヨン蜂起(パ
リ)

5月5日 全国三部会(ヴェルサイユ)

6月20日 ジュード-ポムの誓い

6月23日 国王、親裁会議で国民議会の
解散を命じたが、ミラボー、
バイイらが先頭になりこれを
拒否

7月9日 国民議会、憲法制定国民議会
であることを宣言

7月11日 国王、ネッケルを罷免

7月14日 バスティーユ占拠

この頃より大恐慌(グランド-プール)
王国各地に波及

8月4日 封建的特権の廃止

8月26日 いわゆる「人権宣言」の採択

の動きと連動していたことは言うまでもない。全国三部会開催の宣言は前年の8月8日の勅令によって通知され、同年の12月27日には、国王顧問会が第三身分の代表者数を聖職者および貴族の両身分の合計数と同数にする⁽¹⁾と決定されている。そして、1789年1月24日に代表者選出に関する通達が⁽¹⁾であると、オルヌ県各地にもわかに慌ただしくなっている。2月から3月にかけて確かにG＝ルフェーヴルがアンジュー地方のソミュールのバイイ管区代官の言として紹介しているように、「全国三部会の召集の報せがもたらした最も厄介な効果は、教区の選挙集会在あたかも自ら主権を付与されているかのように思い込み」行動している面がオルヌ県でもいくつかの第一次選挙集会時の陳情書などに確認できる。

すると、2月9日のレグルを皮切りに、18日にアルジャンタン、21日にティバールヴィル、3月はじめにはモルターニュ、また、アランソン徴税管区内のベルネイ、エヴルーなどに、4月には4日と14日にベッレーム、16日～17日にアランソン、18日にセーにて食糧蜂起が発生しているのが認められる。これらの食糧蜂起の特徴はアランソンで4月16日に見られた蜂起の中に典型的に現われていると言⁽²⁾ってよい。

特徴の一つは、当バイイ管区各地で確認されている食糧蜂起情勢の高まりの中で起こっているという点である。これは当管区地方長官のアントワヌ＝ジュリアンの報告書でも明らかに⁽³⁾されている。4月1日に当管区の第三身分の最終陳情書と代表者が決定したばかりで、2週間後には全国三部会が開催される予定になっている段階である。

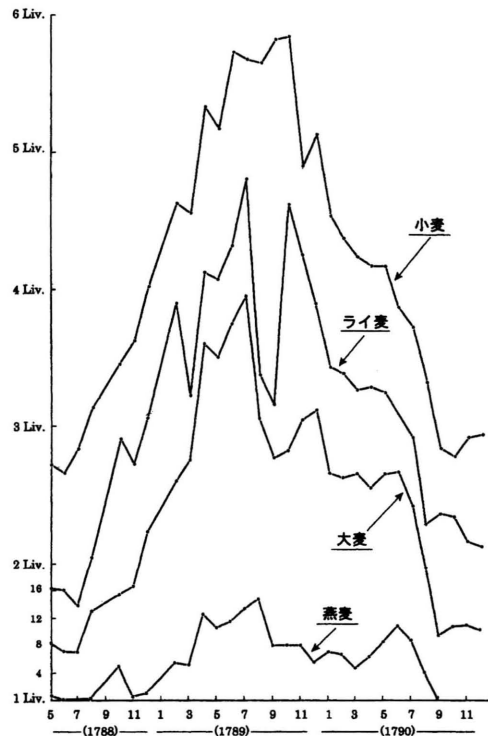
二つ目は、＜資料2＞の史料とその統計グラフでわかるように、蜂起は市内中央市場での穀物価格が前年の同月比で約2倍になったところで始⁽⁴⁾まり、蜂起衆の意識としては「特権階級の陰謀」「貴族の陰謀」との思いが強く、彼らは「買占め」「隠匿」「売り惜しみ」の実態を掌握し攻撃目標を定めている。

三つ目には、蜂起衆の行動様式の面で、警察などの公権力の面前での合

<資料2> アランソン市場における穀物価格の変動

annee	mois	prix du boisseau	prix du quintal	prix du sac	prix du quintal
1788	may	2.14.4	1.16.3	1.18.9	1.18.9
	juin	2.15.2	1.16.1	1.17.5	1.17.5
	juillet	2.16.9	1.16.1	1.17.4	1.17.8
	août	3.18.11	2.15.5	1.18.11	1.18.11
	sept	-	-	-	-
	oct	3.19.5	2.18.4	1.18.5	1.18.5
	nov	3.19.11	2.18.6	1.18.9	1.18.9
	dec	4.11.18	3.11.2	2.18.9	1.18.1
	janv	-	-	-	-
	fev	4.12.7	3.18	2.18.11	1.18.11
	mars	4.11.1	3.16.11	2.18.11	1.18.11
	avr	5.6.6	4.18.9	3.12	1.18.5
1789	may	5.3.6	4.18.9	3.10.1	1.18.8
	juin	5.14.6	4.18.3	3.15.8	1.11.7
	juillet	5.15.11	4.18.1	3.19.10	1.15.6
	août	5.15.3	3.17.5	3.11.8	1.14.9
	sept	5.16.6	3.17	3.11.8	1.14.9
	oct	5.17	4.18.3	3.16.7	1.18
	nov	6.18	4.18	3.16.1	1.18
	dec	5.18.7	3.18	3.18.3	1.18.7
	janv	6.10.7	3.18.7	3.18.2	1.17.11
	fev	4.7.7	3.17.11	2.18.11	1.16.11
	mars	4.4.9	3.15.1	2.18.11	1.16.11
	avr	4.2.9	3.15.1	2.18.11	1.16.11
1790	may	4.2.1	3.15.1	2.18.11	1.16.11
	juin	4.2.1	3.15.1	2.18.11	1.16.11
	juillet	4.2.1	3.15.1	2.18.11	1.16.11
	août	4.2.1	3.15.1	2.18.11	1.16.11
	sept	4.2.1	3.15.1	2.18.11	1.16.11
	oct	4.2.1	3.15.1	2.18.11	1.16.11
	nov	4.2.1	3.15.1	2.18.11	1.16.11
	dec	4.2.1	3.15.1	2.18.11	1.16.11
	janv	4.2.1	3.15.1	2.18.11	1.16.11
	fev	4.2.1	3.15.1	2.18.11	1.16.11
	mars	4.2.1	3.15.1	2.18.11	1.16.11
	avr	4.2.1	3.15.1	2.18.11	1.16.11

アランソン市場の穀物価格の変動 (1788.5~1790.12)



法的行動、穀物「購入＝取得」に際しての「民衆価格」の提示、限定された略奪や打ち壊し行動などが目立つ⁽⁵⁾。

四つ目には、シードル酒やワインを飲んでのドンチャン騒ぎの演出、蜂起行動への参加強制など、伝統的な民衆蜂起の流儀に基づいていた⁽⁶⁾。

五つ目として、地元の騎馬警察隊、さらには次のレヴェルの武力装備を持っていた竜騎兵の意識や対応の中にこれに呼応する、いわば「良きポリス」⁽⁷⁾と思える行動があったことである。

アランソンの食糧蜂起に確認できたこれらの特徴は、その他の地域の食糧蜂起にもほぼ共通してみられる現象であった。そして、これらの蜂起行動は従来イメージされていたような都市民衆だけのものではなく、当然のことながら周辺農村教区民衆も含めたものであった。先に紹介した地方長官の中央政府関係者への報告書の中でも、穀物価格の高騰と飢餓の進行によって当管轄地域全体が危機的状況にあることが強調され、「おそらく、致命的な結果になるかもしれない幾つかの反乱を引き起こしかねません⁽⁸⁾」とまで言い切っている。

(2) バスティーユ事件前後の動向

次に、バスティーユ事件前後の状況を見ておこう。その後、全国三部会開催時には一定の小康状態があったが、6月17日にベッレームで、7月2日には再びアランソンで食糧をめぐる蜂起行動が確認できる。アランソンでは、危機打開のために同市中央市場での穀物取引やその際の価格設定、さらには同市内におけるパン価格について全8か条からなる布告を⁽⁹⁾発布しているのがわかる。

そしてバスティーユ事件のニュースだが、オルヌ県にも伝わっている動きは見えるが、しかし、すぐさまこれに呼応するというような動きにはなっていない。ただ、7月19日になると、アランソンとモルターニュにおい

て「バステューユ奪取の祭り」が実施され、新国家の「花形記章」を掲げるなどの動きがみられるが、同日、＜資料3＞の地図からもわかるように、アルジャンタンでエード税徴収事務所や塩倉庫が略奪され、また、レグルでもドムフロンでも同様の動きが確認される。これが翌20日にはカルージュにも波及している。これらの蜂起行動の詳細はまだ研究レベルでまだ掴みきれていないが、19日のレグルの蜂起行動では、さらに400人以上の蜂起衆がサン＝バルテルミー近くで荷馬車を取り囲み穀物の移動を阻止するなどのことをしていることが史料上確認されているので、食糧蜂起の流れとバステューユ事件の機運が重なっているように判断できる。⁽¹¹⁾

それに続き、グランド＝プールの前兆のような動きも見えている。これは、22日の夜からの動きである。「マメールの町の使いの者が、全体で1500～1600人の数の盗賊軍（ブリガン）がサン＝コムからベッレームへの路上に22日の夜から現われ大損害を与えていると伝え救援を求め、その日の深夜にアランソンに到着した。（中略）人々は武器庫に駆けつけ、夜の間にそれが配られ、朝には大勢の人々に渡った。しかし、幸い取り越し苦勞であった」⁽¹²⁾と伝えている史料が残っている。実際は誰も会っていないし、目撃もされていないけれども「ブリガン襲来」の流言だけが広まっていたことを物語っている。同時に、「特権身分に雇われた盗賊集団（ブリガン）が民衆を飢えさせるために熟していない小麦を刈った」⁽¹³⁾という流言も伝わっている。

アランソン・バイイ管区において史料上確認できる「ブリガン襲来」の情報はこれだけだが、これらがともに7月22日から23日にかけての動きであるということと、前者が地方の行政当局や治安当局を中心にした騒ぎであるのに対して、後者のその表現の背後には「貴族の陰謀」という意識が含まれていたという点は注目しておく必要があるだろう。

(3) グランド・プール期の展開

そうした動きが県中・東部地帯に顕在化していた頃、県北西部において中小都市や農村教区の民衆が蜂起するに至っている。その始まりが7月22日であった。＜資料4＞の「地図」を見ながら8月2日までの動きを押さえておこう。⁽¹⁴⁾

まず、最初の蜂起は7月22日から25日にかけてフレール地域の五つの城館が攻撃されたというものである。セグリ侯爵、ヴァッシー伯爵、アルクール公爵、オワヤムソン侯爵らの城館が、警鐘の鳴り響くなか、主に周辺農村教区民からなる蜂起衆によって略奪されている。

その動きが、24日に今度はその南東側の諸教区に波及している。ここでも周辺諸農村教区を巻き込み、数百人に達した蜂起衆がリニュとブリウズの城館に押しかけている。本稿で詳しく分析する民衆蜂起の一つがこの地域のものである。また、同日に蜂起が確認されるその南西に隣接する諸教区の蜂起衆はラ-クーロンシュ城館を攻撃している。第一次選挙集会時に作成された最初の陳情書の中でもしばしば問題となっていたアンデーヌの森だが、これらの教区はその北側に位置した諸教区である。ここが二つ目の注目地域である。

その後、この「領主城館への攻撃」の一つは翌日の25日にラヌ地域へ波及し、もう一つは27日からの動きがアンデーヌの森を越えた南側の諸教区に確認されている。それらの中で最も多くの情報をもたらしてくれているクーテルヌ城館攻撃の状況を、本稿では最後に見ていくことになる。

それら本稿の分析対象となるところ以外の「城館攻撃」の様子についても簡単に見ておこう。史料上確認できるところでは、まず、ラ-モット-フケ城館では、ここでは年老いて体の不自由な領主が数年前に土地を購入したのだが、そこが森林を守るための荒蕪地であったことから、教区民に激しく憎まれていたために、蜂起衆に襲われている。

＜資料5＞ 城館攻撃の展開と暴力

	忠心教区の住民構成	指導層	参加共同体	蜂起衆の動き
リニユ 城館攻撃	<ul style="list-style-type: none"> *リニユ (Lignou) ・総人口 : 470人 ・総戸数 : 104戸 ・受動市民 : 14戸 (13.5%) ・援助 (+) : 138人 (29.4%) 	<ul style="list-style-type: none"> ルイ=ジボー (大地主) ? ジャン=ドゥランジュ (小麦粉商人, 110l. 4s. 7d.) フランソワ=ベニエ (請負小作人, 76l. 19s.) ジャック=ムラン (大工, 1l. 18s. 3d.) 	<ul style="list-style-type: none"> ブリウズ (Briouze, 小郡首邑) ル=メニル=ブリウズ (Le Menil-de-Briouze) 	<ul style="list-style-type: none"> ・300人 (600人という証言も) 以上の教区民の参加 ・警鐘を強制的に鳴らす ・小銃, 短銃, 長柄の鎌, フォーク, 斧などで武装 ・城館の略奪, 文書類の焼却 ・領主のル=フォレストイエド=ラ=デュランディエールと森林監察官 (フランソワ=イレール), 密猟監視人 (シャルル=フルーリ) を脅迫 ・教区共有地 (領主反動で横領されていた) に集まり, 生垣の木を引き抜き, 若木を切り倒し, そこに教区民の家畜を放し飼いにし, 水車小屋の破壊を通告 (未遂)
ラ=クーロンシュ 城館攻撃	<ul style="list-style-type: none"> *ラ=クーロンシュ (La Coulonche) ・総人口 : 1,670人 ・総戸数 : 341戸 ・受動市民 : 59戸 (17.3%) ・援助 : 203人 (12.2%) 	<ul style="list-style-type: none"> マラン=ビドゥ (宿屋の主人, 30l. 15s.) シャルル=ゴートイエ (宿屋の主人) ? ファヌー (共益委員) サン=マルタン=ラ=リゴディエール (地主, 踏鉄商人) ? ビエール=モレル (日雇農民, 2l. 11s. 2d.) 	<ul style="list-style-type: none"> ラ=フェルテ=マセ (La Ferté-Macé) ラ=ソヴァジェール (La Sauvagère) 	<ul style="list-style-type: none"> ・約400人の参加 ・「国王の命令だ! 警鐘を鳴らしなさい」 ・ラ=クーロンシュ教区主任司祭を城館攻撃に同行させる ・「ラ=クーロンシュの大悪魔」といわれたF=ダルグージュの子孫, モントリュエ伯の城館略奪, 文書類の焼却 ・密猟監視人で所領管理人のジャン=バプティスト=セボーの家屋の略奪
クーテルヌ 城館攻撃	<ul style="list-style-type: none"> *クーテルヌ (Couterne) ・総人口 : 1,500人 ・総戸数 : 344戸 ・受動市民 : 63戸 (18.3%) ・援助 : 278人 (18.5%) 	<ul style="list-style-type: none"> ジャック=ビニョン (宿駅長, 43l. 11s. 9d.) ビエール=グリュン (地主, 35l. 16s. 10d.) ノエル=アッペル (商人, 33l. 6s. 9d.) ジャン=フロジェ (地主, 28l. 4s. 1d.) ミシュル=プーレ (織布工, 12l. 16s. 4d.) サン=マルタン=デュ=ブレッシ (元弁護士) ? 	<ul style="list-style-type: none"> リニユ ラ=クーロンシュ テッセ (Tessé) アントワニー (Antoigny) メウダン (Méhoudin) ヌイイ=ル=ヴァンダン (Neuilly-le-Vendin) サン=トゥアン=ル=ブリズル (St.-Ouen-Brisoult) 	<ul style="list-style-type: none"> ・700~800人が参加 ・デュ=ブレッシがクーテルヌの主任司祭と公証人を拘束し, 同行させる ・土地関連古文書を渡さなければ城館に火をかけると言い, 城館の中庭に参集する ・ガラス窓を壊し, 門扉, ワイン倉や地下倉庫の扉をこじ開け, シールド酒やワインを奪い, 酔っ払う ・古文書保管庫の古文書を奪い, 焼却

ラス城館では、ラ-クーロンシュ城館と同様に「ラ-クーロンシュの大悪魔」と渾名されたモントリュウ伯爵が所有するものであったが、「古文書保管庫を燃やすためにやって来た」との宣言を受けて攻撃されている。

そして、この「地図」を見ると、これらアンデーヌの森周辺の蜂起は、7月末にはカルージュ城館にも飛び火し、さらに県中部のエクーヴの森の北側のセー、モルトレ、サン-ティレール-ラ-ジェラル地帯に波及していることがわかる。⁽¹⁵⁾ここでも、特権の廃止が主張され、当然のごとく城館内に保管されていた証書類が奪われ焼却されている。

また、ほぼ同時期に、グッフェルの森の西側で郡都アルジャンタンの北西に位置するロネイでは、蜂起衆は城館に出向き何種類かの公文書を焼却する行為には及んだが、しかし、ここでは後で鳩小屋を閉鎖しただけで略奪には至っていない。⁽¹⁶⁾きわめて冷静な行動であったことがわかっている。

こうした一連の蜂起情勢については、ドムフロン下級裁判所がパリ宛の書簡で「ここでは、総ての農民が戦闘態勢にある」と報告し、⁽¹⁷⁾件の地方長官ジュリアンも7月25日の書簡で「私の所轄地域のすべてのところで警鐘が鳴っています。至るところから盗賊集団（ブリガン）が出没し、略奪し、家々に放火していることが伝えられています。（中略）王税 *droits du Roi* はもはや期待できません。すでに、塩税は1リーヴルにつき6ソルの割合でしか支払われなくなっています（後略）」⁽¹⁸⁾と伝えている。

このように、史料上確認できるもので、今回その展開が辿れたところだけでなく、その他の地域の中小都市や農村教区においても、いわゆる蜂起情勢下にあったことを物語っている。また、興味深いことに、ジュリアンの書簡からは、蜂起衆の存在が盗賊集団であると権力側に認識されていたことが明確となった点である。これが、先に見た「ブリガン襲来」の騒ぎの2日後の状況だったのである。

(1) G=ルフェーヴル（高橋幸八郎、柴田三千雄、遅塚忠躬共訳）『1789年—フランス革命序論』岩波書店、1975年、197頁。

- (2) 近江「1789年の食糧蜂起」。
- (3) A. D. O., C 1166.
- (4) 近江「1789年の食糧蜂起」, 11～13頁。
- (5) 同上, 15頁。
- (6) 同上, 16頁。
- (7) Louis Duval, *Ephémérides de la moyenne normandie et du perche en 1789*, Alençon, 1890, p.52.
- (8) A. D. O., C 1166.
- (9) Recueil des documents d'ordre économique contenus dans les registres de délibérations des municipalités du district d'Alençon, in Felix Murlot, *Collection de documents inédits l'histoire économique de la Révolution française, département de l'Orne*, Tome I-III, Alençon, 1907, pp.16-17; 近江「グランド-プール期」, 61頁。
- (10) L. Duval, *op. cit.*, p.105.
- (11) *Ibid.*, p. 103.
- (12) Arch. Muni. d'Alençon, Cote 38-c, N. 182; Gérard Bourdin, *Aspects de la Révolution dans l'Orne 1789-1799*, Alençon, 1991, pp.16-17.
- (13) G. Bourdin, *ibid.*, p.16.
- (14) R. Jouanne, *op. cit.*, pp.22-80.
- (15) A. D. O., série B, Supp. 14; G. Lefebvre, *op. cit.*, p.122; L. Duval, *op. cit.*, p.128; G. Bourdin, *op. cit.*, p.18; 近江「グランド-プール期」, 66頁。
- (16) 同上。
- (17) 同上。
- (18) L. Duval, *op. cit.*, pp.113-114.

2. 7月24日以降の蜂起展開と暴力

それでは次に、ジュリアンがそうした情報収集をしていたであろうその頃、アンデーヌの森周辺で発生していた三つの城館攻撃について、＜資料5＞の「表」を見ながらそれぞれの蜂起展開の流れを簡単に追いかけていくことにしよう。

(1) リニュ城館攻撃

まず、リニュ城館攻撃はどうだったのだろうか。蜂起の舞台となったリニュ教区の住民構成をみると、総人口は470人、総戸数104戸、受動市民14戸（13.5%）、援助を必要とする人々138人（29.4%）となっている⁽¹⁾。指導層はこの地域の大地主であったルイ=ジボー、小麦粉商人のジャン=ドゥランジュ（110*l*.4*s*.2*d*. 以下、括弧内はタイユ税負担額）、L=ジボーの請負小作人のフランソワ=ペニエイ（76*l*.19*s*.），大工のジャック=ムラン（1*l*.18*s*.3*d*.）の面々である⁽²⁾。ともに居住教区は隣接するル=メニル=ブリウズ教区であった。また、当城館攻撃に参加した教区はリニュ、ブリウズ、ル=メニル=ブリウズというブリウズ小郡内の3教区だった。

蜂起衆は300人以上の教区民で構成され、彼らは強制して警鐘を鳴らさせ、小銃、短銃、長柄の鎌、フォーク、斧などで武装し、リニュ城館に押しかけ、城館を略奪し、領主のル=フォレストイエ=ド=デュランディエール、森林監察官、密猟監視人等を脅迫して文書類を出させ、それを焼却している。

それだけではなく、蜂起衆は当領主によって横領されていた教区共有地に集まり、生垣の木を引き抜き、若木を切り倒し、そこに彼らの家畜を放し牧草を食べさせている。さらに水車の破壊を脅迫するなどのこともしている⁽³⁾。

以上の行動内容からもわかるように、蜂起衆の要求は明確であった。一つは城館内の「古文書保管庫」よりの文書類の引渡しであり、二つには、森林監察官と密猟監視人に対する森林用益などの封建的諸権利を放棄する旨の誓約書への署名強要である。

このように、これらの蜂起展開においてみられた暴力行使は、ジュリアン等が捉えたような盗賊集団によるしたい放題の自暴自棄となった暴力というのではなく、教区共同体住民の目的意識的なそれであったことがわかる。

(2) ラ-クーロンシュ城館攻撃

次の、ラ-クーロンシュ城館攻撃はどうであったのだろうか。ラ-クーロンシュ教区の住民構成は総人口が1,670人、総戸数341戸、受動市民59戸(17.3%)、援助を必要とする人々203人(18.5%)となっている。指導層⁽⁴⁾としては宿屋経営者のマラン=ビドゥ(30l.15s.), 同業者のシャルル=ゴティエ(負担額不明), 日雇農民のピエール=モレル(2l.11s.2d.), 共益委員のファヌー(負担額不明)等の名前が挙がっているが、さらに東隣りのラ-ソヴァジェール教区の地主で蹄鉄商人であったサン-マルタン=ラ-リゴディエール(負担額不明)および彼の息子で元弁護士であったラ-フェルテ=マセ在住のS.M.=デュ=ブレッシ⁽⁵⁾(負担額不明)等も顔を出していた。

当城館攻撃に参加した教区は、ラ-ソヴァジェールと当小郡の中心地であったラ-フェルテ=マセ教区だった。蜂起衆は約400人であると証言されている。彼らも「国王の命令だ!」と言いながら警鐘を鳴らさせ、さらに当教区主任司祭を城館まで同行させている。そして、「ラ-クーロンシュの大悪魔」といわれたF=ダルグージュの後を継いだモントルリュ伯の居館に向い、そこの古文書保管庫の文書類を焼却し、その勢いを維持したまま同伯の所領管理人で密猟管理人を兼ねていたジャン=バプティスト=セボー⁽⁶⁾の家屋に殺到し、そこを略奪している。

ここでも、蜂起衆のねらいははっきりしていると言えるだろう。同じように、ラ-クーロンシュ城館の古文書保管庫内の土地証書やその他の証書類の引渡しを要求している。ただし、ここではさらに支払われてきた森林用益に関する罰金の返還が要求されていて、また、おそらく蜂起拡大のうねりを察知してどこかに雲隠れしてしまったからなのか、同時に、彼らは密猟監視人および所領管理人であったジャン=バプティスト=セボーの身柄の引渡しを求めている。しかし、当分析において使用されている「警察調査」類では、蜂起衆がさらに過激化し乱暴狼藉の限りを尽くし暴動化した

とは言っていない。

このように、この城館攻撃に際しても蜂起衆の暴力行使の対象はきわめて明確であり、限定されたものであった。

(3) クーテルヌ城館攻撃

さて、三番目のクーテルヌ城館攻撃ではどのような展開があったのであろうか。先にも言及したように、ここはアンデーヌの森の南側に位置している。まず、中核となったクーテルヌ教区の住民構成を見ておこう。総人口は1,500人、総戸数344戸、受動市民63戸（18.3%）、援助を必要とする人々278人（18.5%）となっている⁽⁷⁾。指導層には、当教区の宿駅長ジャック=ピニョン（43l.11s.9d.）、地主のピエール=グリヨン（35l.16s.10d.）、商人のノエル=アップル（33l.6s.9d.）、地主のジャン=フロジェ（28l.4s.1d.）、職布工のミシェル=プーレ（12l.16s.4d.）等が登場している⁽⁸⁾。

当城館攻撃に際しては、実に多くの周辺教区民の参加が見られた。隣接するところでは、テッセ、アントワニー、メウダンの各教区、メウダンよりもさらに東側でヴォージョワ城館攻撃にも参加していたヌイイ-ル-ヴァンダンとサン-トゥアン-ル-ブリズルの両教区、それに特定人物のみの参加ではあるが、アンデーヌの森の北側のリニュ教区の居酒屋店主のソワイエ、ラ-クーロンシュ教区の指導者でもあったマラン=ビドゥ、さらにラ-フェルテ-マセの元弁護士 S.M.=デュ-プレッシ等も活躍している様子がわかっている。蜂起衆は700～800人にふくれ上がっていた。

当城館攻撃については、詳細な蜂起経過がラ-フェルテ-マセの警察当局の作成した「調書」で辿れる。しかし、ここでも彼らの蜂起行動は先の二つの城館攻撃と同様のものであった。警鐘の鳴り響くなか、主任司祭や公証人の身柄を拘束し城館まで同行させ、城館の部分的打ち壊しや略奪を行ない、最終的に古文書保管庫の文書類を奪い中庭にて焼却する。つまり、

ここでも蜂起の最大の目的は、クーテルヌ城館の古文書保管庫の攻撃と土地証書類の没収であったのである。⁽⁹⁾

さて、以上三つの城館攻撃をみてきたが、それらに確認できた蜂起展開と暴力の形を全体として振り返り整理してみよう。

一つには、それらがアンデーヌの森の森林用益権を中心とした共有権の回復に係わる諸問題の解決を求めて進められていたということが明らかになった点である。

二つには、複数の教区民が蜂起衆を形成しそれぞれの領主城館を攻撃し、さまざまな脅迫的文言を浴びせかけながら「古文書保管庫」を開けさせ、土地証書類を没収し、それらの焼却を目指したという点である。

三つには、蜂起衆の暴力行使は限定されたものであったということである。それは史料上のいくつかの証言場面に確認されるものののだが、いわば、素人芸人の作った粗雑なシナリオに基づき、多くの教区民がエキストラとなり演じられる楽劇のような雰囲気とでも言いたくなる不十分さと、迫真に迫る不退転の凄みが同居する巧みな演出が繰り広げられていたということである。主人公となった指導層は、ほとんどが各教区において中・上層の立場にあった者達であり、先の第一次選挙集会でもリーダーシップを発揮した連中で、最初の陳情書作成においても中核的役割を果たし、その陳情書にも署名人として名を連ねていた者たちだったのである。

(1) << I. C. M. >>, Canton de *Briouse*, A. D. O., série L 1722.

(2) 陳情書については A. D. C., série 16 B, 116に、タイユ税額については *Le Mesnil de Briouse*, taille de Mil Sept cent quatre-vingt-dix, A. D. O., série C 1274に基づいた。

(3) A. D. O., série non classée; R. Jouanne, *op. cit.*, pp.22-28; K. Dulong, *op. cit.*, p.84; 近江「蜂起衆」, 22~24頁。

(4) << I. C. M. >>, Canton de *La Ferté-Macé*, A. D. O., série L 1722.

(5) 陳情書については A. D. C., série 16 B, 66に、タイユ税額については *La Coulonche*, taille de Mil Sept cent quatre-vingt-dix, A. D. O. série C 1274に基づいた。

(6) A. D. O., série non classée; R. Jouanne, *op. cit.*, pp.30-38; K. Dulong, *op. cit.*, p.76 et 84; 近江「蜂起衆」, 24~26頁。

- (7) << I. C. M. >>, Canton de *La Ferté-Macé*, A. D. O., série L 1722.
 (8) 陳情書については A. D. C., série 16 B, 70に, タイユ税額については *Couterne*, taille de Mil Sept cent quatre-vingt-dix, A. D. O., série C 1274に基づいた。
 (9) A. D. O., série B, dossier émeute de 1789; R. Jouanne, *op. cit.*, pp.49-50; K. Du-long, *op. cit.*, pp.77-78; 近江「蜂起衆」, 26～27頁。

3. 暴力行使の類型的把握

では、最後に三つの城館攻撃に見られた暴力の質を見直し、また、その暴力行使にこめられた中小都市民や農村教区民の思いをあぶりだしてみることにしよう。

(1) 暴力行使の対象

<資料6>の「一覧表」は暴力行使の諸側面を示している。これを一瞥するだけで蜂起衆の暴力行使の対象がどこにあったかは一目瞭然である。繰り返しなが、リニュであれラ-クーロンシュであれ、密猟監視人や森林監察官がしっかり狙われていることは象徴的ともいえる現象である。クーテルヌの「税徴収人の妻 (femme de charge), スザンヌ=ヴィエル」がこきおろされたのも、確認は取れていないが、彼女の夫が森林も含めた所領管理にも従事していたからなのかもしれない。その可能性は高い。

また、各教区の主任司祭が例外なく脅迫され、さらには自由を束縛され蜂起行動に同行させられているのも興味深いことである。

そして、城館攻撃、「古文書保管庫」の土地証書類の没収という具合に、暴力行使の対象は見事なまでに一致していた。

警察調書での証言録はそれ以外の暴力対象を問題にするケースは皆無とあっていいほどである。アランソンの地方長官ジャン=ジュリアンに伝えられているような盗賊集団としてこれらの蜂起衆が何らかも手当たり次第

＜資料 6＞ 暴力行使の類型的把握

	暴力行使の対象	暴力行使の正当性と合法性	教区陳情書情報	史料
リニュ 城館攻撃	<ul style="list-style-type: none"> ・リニュ城館，古文書保管庫内の土地証書などの文書類 ・森林監察官と密猟監視人，彼等へ森林用益などの封建的諸権利（それを放棄する宣言文への強制署名） ・「領主反動」で奪われていた共有地，バナリテ権（水車小屋） ・教区主任司祭 	<ul style="list-style-type: none"> ・「全国三部会が廃止した封建制の痕跡を残さないために総ての古文書保管庫を焼き払うよう，全封建諸侯に命じた国王の布告が届けられたことが，ブリウス・リニュおよびその周辺の諸教区において布告された」（ルイ・ジボーのラ・フェルテ・マセの憲兵隊長長宛の嘆願書） ・「王国中に広がったブリガン（盗賊集団）の軍団が，国王陛下の意思のそむくことなく，城館を攻撃し古文書を奪い取り，さらに領主の住居や領地に対する暴力行為を犯すことができると説得しつつ，町や村の住民を騙すことに懸命になっている」（89年8月9日付国王布告，Tome 1974, 19） ・「知っての通り，多くの地方においてブリガン及びならず者が出沒し，ありとあらゆる暴力を自らはたらいただけでは飽き足らず，農村住民の気持ちを掻き立てるに至った。そればかりかこの者たちは余の命令と偽り，また，余の顧問会議の決定とも偽り広めるなどの図々しさを示し，城館を攻撃し，文書や多様な不動産登記証書を台無しにして，余の意思を果たし，余の意向に逆えよと説得した」（89年9月2日付国王通達，Tome 1974, 21） 	<ul style="list-style-type: none"> ・タイム税（道路税込み）の負担軽減 ・肥料代を含む領主制地代の負担軽減 ・塩税率の軽減 ・慈善団体の救援無しには生きていけない多くの教区民の救済 ・国王課税徴収経費の削減 ・リニュ教区の惨状（地味の乏しい土地柄で，ライ麦，ソバ，燕麦しか産出されず，3ヶ月ほどしかもたない 	<ul style="list-style-type: none"> ・ Arch. D. Calvados, 16B, 116 ・ A. D. Orne, série non classé ・ A. D. O., L 1722 ・ A. D. O., B Supplément 14
ラ・クローンシュ 城館攻撃	<ul style="list-style-type: none"> ・ラ・クローンシュ城館，土地証書などの文書類 ・密猟監視人および所領管理人であったJ.B.マセボー ・教区主任司祭 ・徴収されていた森林用益に関する罰金 		<ul style="list-style-type: none"> ・地方三部会の開催，第三身分代表の意見表明の保障 ・多様な形態のすべての税概念を統一して，身分およびその他の区別無く，収入の多少に応じた税負担に ・バナリテ諸税の徴収の廃止 ・領主制地代の5%への引き下げ ・教区民を苦しめているアンデーヌとデュフィの両森林の野生動物駆除のために，武器使用の復活 	<ul style="list-style-type: none"> ・ A. D. C., 16 B, 66 ・ A. D. O., série non classé ・ A. D. O., L 1722 ・ A. D. O., B Supplément 14
クーテルヌ 城館攻撃	<ul style="list-style-type: none"> ・クーテルヌ城館，土地証書などの文書類 ・教区主任司祭，公証人 ・城館内のワイン倉など ・中庭に飼われていた猪 ・ガラス窓，門扉，空瓶など ・税徴収人の妻，スザンヌ＝ヴィエル 		<ul style="list-style-type: none"> ・タイム税の公平な配分 ・住民達は，多様な税の重圧に苦しんでいる ・耕作時に過酷な労働が求められるソバとライ麦，それにわずかな燕麦しか産出されない ・当教区の不毛性が，毎年多くの出稼ぎを促している ・塩税と物品税の税率軽減 ・カーン下級裁判管区からの離脱 	<ul style="list-style-type: none"> ・ A. D. C., 16 B, 70 ・ A. D. O., série B ・ A. D. O., L 1722 ・ A. D. O., B Supplément 14

に略奪する、といった実態はどこにも見当たらない。

（２）暴力行使の構造

さて、すでにここまでの検討の中でも見えているように、蜂起衆は意外にも整然とした動きをしめしている。先にも指摘したように何かを演じているような感じ、とも錯覚してしまいそうな、指導層を中心とした教区共同体成員の社会的結合関係をベースにした統制の執れた蜂起行動を思わせる痕跡が多い。

ここでは、限られた史料情報が伝えてくれる蜂起衆の暴力行使の仕方をクローズアップすることにしよう。つまり、蜂起開始や城館までの行進の状況、城館攻撃の場面での蜂起衆の動きから暴力行使に際して確認できる彼らのパフォーマンスに注目することになる。

まず注目すべきは、蜂起開始のシグナルともなった「警鐘 (tocsin)」の活用の問題である。これは先の地方長官も「すべてのところで警鐘が鳴っています⁽²⁾」と書き記していたが、蜂起関連史料からも、7月22日以降のすべての「城館攻撃」攻撃で確認できる現象であった。

いうまでもなく、教区民の日常生活を律していたのは教会の鐘であった。これが警鐘ともなれば教区民はとにかく結集するのを常識としていたわけで、これら三つの城館攻撃に向けてこれが行動開始を告げることになったと考えられる。もちろん、鐘楼を管理している教区司祭たちは、史料上は脅迫されてそれに従ったとあるが、蜂起衆の中に連れ出されている。そうしたなかで、教区民もただ漫然と集まったというのではなく、「小銃や長柄の鎌」などで武装している。この武装して馳せ参ずるという行為はすでに自覚的な「結集体」としての「蜂起衆」が成立したことを象徴的に示している。

次いで、蜂起衆のさまざまな動きが見られるのは城館攻撃の場面である。

とりわけ1789年10月2日、ラ-フェルテ-マセの憲兵隊が書き上げた「調書」がその辺の具体的な行動の詳細を報告している。先にもみたこの「調書」をさらに見ると、蜂起衆は「土地に関する古文書を渡さなければ城館に火をかけるとののしり」、「彼らの指導者でもあった（中略）、サン-マルタン=デュ-プレッシなる者は、木靴、ガウン、ナイトキャップ姿のクーテルヌ主任司祭の襟飾を片手に、もう一方の手でクーテルヌの公証人を拘束しつつ、秩序は維持されている」と言って登場しているのがわかる。そして、「ブリガンの一部が古文書保管庫に乱入し、他の者たちはかがり火を焚き、ガラス窓を壊し」、さらに「ワイン倉や地下倉庫の扉をこじ開け、シードル酒やワインを飲み酔っ払い、約400本の瓶を割る」などのドンチャン騒ぎをしたと書き留められている。そればかりではなかった、「ブリガンたちは、中庭に飼いならされていた猪を小銃で殺し、長柄の鎌で屠殺した。また、彼らは約300発もの銃撃で猪を射殺するなどした⁽³⁾」というのである。

「調書」では、蜂起衆をしきりに「ブリガン（盗賊集団）」だと決め付けているが、強調すればするほど、蜂起衆の抑制されたパフォーマンスが目立っている。これらの行為は、滑稽な姿格好にさせられた主任司祭の出で立ちといい、ワインなどを飲んで酔っ払った連中（酔漢）によるかがり火を囲んでの乱痴気騒ぎといい、そして、猪を生贄にするという血祭騒ぎを演出するなど、明らかにシャリヴァリの場面に確認できる定番の出し物であったことがわかる。こうして、蜂起指導層と蜂起衆は彼らにとってもっと許せないと思っている諸問題の解決を図ったのである。

（3）暴力行使の正当性と合法性

ところで、リニュ城館攻撃の指導者の一人であったルイ=ジボーは、後日、ラ-フェルテ-マセの憲兵隊大隊長に宛てた嘆願書においてこう言っている。「全国三部会が廃止した封建制の痕跡を残さないために総ての古文

書保管庫（chartriers）を焼き払うよう、全封建諸侯に命じた国王の布告が届けられたことが、ブリウズ、リニュおよびその周辺の諸教区において布告された。この悪意に満ちた言動がでっちあげた卑劣な行為が、他のところにも及んで農民たちの間に最大の高揚を引き起こし、災いを招いた⁽⁴⁾というのである。

この「国王の布告」をめぐることは、史料に登場する関係者はこれを振り返って、結局「偽布告」であったと結論付けているのだが、これが「偽布告」であったとしても、現に、教区民達はこれを根拠に蜂起したのだということを、この史料は語っている。

これと似たような意識下の動きとして注目すべきなのは、先に確認できたラ-クーロンシュのピエール=モレルの「国王の命令だ！鐘を鳴らしなさい⁽⁵⁾」という発言である。この「国王の命令」も「国王の布告」も、国王の権威の下に自らの蜂起行動を正当化していることが見えてくる。この意識は、これまでの研究が明らかにしていることだが、全国三部会開催に向けて開始された第一次選挙集会時の場面、あるいはそこで作成された最初の陳情書の中にも見られたものであった。

同時に、ルイ=ジボーの嘆願書で見過ごせないのは、「全国三部会が廃止した」という表現である。これもその事実関係が問題なのではなく、国王の召集した先の全国三部会が決定した「封建制の廃止」という論理が、意味をもってしまっているという事実である。つまり、だから古文書保管庫を焼き払うという行為は合法的なのだということを言っている。

ただし、このジボーの嘆願書は、逃亡していた彼が後日逮捕された後に書かれたもので、自らの蜂起への関与を弱めるために、あるいはやむを得ずという面を強調するために提出されたという点を考慮しなければならない。ところが、次の史料を読むと、彼のその姿勢はそうだったとしても、嘆願書に書かれた蜂起発生の背景説明が全く彼の作文であったとは言えないことがわかってくる。

それは、複数の史料で裏付けられていることなので、いまさら強調する必要もないことだが、専修大学図書館が所蔵している「ミシェル＝ベルンシュタイン、コレクション」史料の中にも見出すことができる。＜資料6＞の一覧表にも書き出しておいたが、その一つは、1789年8月9日にヴェルサイユにおいて発布された「国王布告」である。そこではこう言っている。「王国中に広がったブリガン（盗賊集団）の軍団が、国王陛下の意思にそむくことなく城館を攻撃し、古文書を奪い取り、さらに領主の住居や領地に対する暴力行為を犯すことができると説得しつつ、町や村の住民を騙すことに懸命になっている⁽⁶⁾」というのである。

もう一つは、約2ヶ月後の9月2日にベルサイユから発せられた「国王通達」である。ここには「知っての通り、多くの地方においてブリガンおよびならず者が出沒し、ありとあらゆる暴力を自ら働いただけでは飽き足らず、農村住民の気持ちを掻き立てることに至った。そればかりか、この者達は余の命令と偽り、余の顧問会議の決定と偽造して広めるなどの図々しさを示し、城館を攻撃し、文書や多様な不動産登記証書を台無しにして、余の意思を果たし、余の意向に応えよと説得した⁽⁷⁾」と書かれている。

このように、国王自らが証言していることからしても、ルイ＝ジボアの嘆願書はリニユ城館攻撃開始時の蜂起衆の情勢認識や思いをかなり正確に伝えていたことになる。この共通意識の下に正当性、合法性を取得した彼らは自信を持って蜂起衆と化し、正義の制裁、懲罰あるいは報復へと突き進んでいったことが見えてくる。

(1) A. D. O., série B, dossier émeute de 1789.

(2) L. Duval, *op. cit.*, p.113.

(3) A. D. O., série B, dossier émeute de 1789.

(4) L. Duval, *op. cit.*, p.110.

(5) R. Jouanne, *op. cit.*, p.34.

(6) De par le Roi, à Versailles, le 9 août 1789, in *Collection des Documents de Michel Bernstein*, Bibli. de l'Université SENSU, Tome1794-19.

(7) Lettre du roi aux archevêques & évêques de son royaume, à Versailles, le 2 septembre 1789, in *C. D. M. B.*, Tome 1974-21.

おわりに

以上のように、オルヌ県西部の3ヶ所の城館攻撃に絞り込んだ分析によって、後に「ジャクリー」ともいわれることになった、民衆蜂起の暴力行使の場面に関する史料の詳細な読み直しをしてきた。そして、いわゆる「下から」の暴力に含まれる多様な意味や狙いを浮き彫りにしてきた。

その結果、国王や地方長官などが「ブリガン（盗賊集団）」と認識したこれらの城館攻撃が、また、この時期の地方の中小都市や農村地域のいわゆる「領主館闘争」が、そうした紋切り型の表現では捉えきれないほど抑揚の効いた暴力行使によって、しかし、効果的な方法によって所期の目的を達成していたということが見えてきたように思う。

そして、その正当性や合法性によって裏付けられた暴力は、暴動一般のそれとは大きく違って暴力行使の対象が限定されていて、それらに対する報復の範囲も制裁、懲罰のレベルに留まるものであった。史料上、略奪と表現された場面でも、いわゆる「打ち壊し」の意味合いが前面に出た、一種の「異議申し立て」あるいは「物言い」の思いの発露した儀礼的なにおいのする、中途半端な演出の側面が強いと判断できた。

このように、革命期初期のジャクリーは、革命を起こし絶対王政を打倒しようとしたものではなく、教区陳情書がそうであったように国王への深い尊敬の念を表わし、領主制を基盤とする<アンシャン-レジームの悪弊>の一つでもある特権身分の下手際を問題視し、それらを告発したのであった。オルヌ県中・西部地域ではとりわけ森林用益権にかかわる問題に収斂されていったのである。

それにもかかわらず、客観的にはこれらの運動がフランス王国の土台を

揺るがしかなない情熱と急進性をもっていたために、当時の政治情勢の下では「領主館闘争」といった「反領主」運動に留まらず、蜂起の実態あるいは蜂起衆の主観的意図を超えた一種の「革命性」を帯びたものとして理解されてしまうのであった。

このことから言えることは、「農民運動はある条件の下では『農民革命』になりえたが、ある場合には『農民戦争』または単なる『農民反乱』と呼ばれ、またある情況においては『農民的反革命』にもなった」と遅塚忠躬がうまく説明しているように、農村、都市を問わず、民衆蜂起はいくつかの条件の下で多様な顔を持つことになる結論付けられるのである。

(本稿は、日本私立学校振興・共済事業団「平成21年度学術研究振興資金」事業、『『ミシェル＝ペルンシュタイン文庫』の史料学的研究』の成果の一部である。)